

竹の琴 西すいきんが走る

森野 水琴

彼は十二月に奈良マラソンを走った。かつての都、平城京の南を走り緊張した。夏に要人が凶弾に倒れた現場に思いを寄せた。

奈良市から天理市へ走る途中で楽器を叩く音が聞こえた。竹が奏でられているようである。木琴ならぬ竹の琴である。心地よい響きが背中を押す。勇ましい太鼓とは別な温かみを感じられる。

折り返して再び竹の琴を聞いた。道を挟んで竹林に反響する。竹の琴に包まれていようで心地いい。

ふと考えた。彼は何になりたいのだろうか。

心地よく響く音になりたいのだろうか。

良い音を奏でる竹になりたいのだろうか。

良い音を奏でる者になりたいのか。

いや 良い言の葉を紡ぐ者になりたい

一年後の十二月、彼は奈良マラソンに帰ってきた。

竹林が近づき、竹の琴が心に沁みる。

奏者たちは彼よりも年上に見受けられた。

今回も往きと帰りの二回演奏を聞いた。

帰りには感謝の挨拶をして彼はゴールを目指した。

また来年も聞きに来よう

また一年たち、彼は奈良マラソンを走った。

スピードは確実に落ちてきて、春にハーフマラソンに二回挑戦するも、二回とも途中で制限時間オーバーしてしまった。

奈良マラソンが近づいてもスピードは戻るどころか、遅くなるばかり、完走出来ないかもしれないという不安で一杯になった。

レース当日は絶好のマラソン日和に恵まれた。走り出した彼は軽やかな脚に驚いた。十月に他界した友が背中を押してくれているかのようにだった。

十八キロ地点の手前に竹林がある。待ち焦がれた竹の琴が聞こえる。彼が手を振ると、奏者の一人が応えてくれた。

二十五キロで折り返し、三十二キロ地点過ぎで竹林に再会。

「ありがとう、また来年」と彼は挨拶して走り続けた。

三十九・六キロ地点が最終関門。無事クリアして、あとはウイニングランである。

「西さん、やったよ」と内心つぶやきながら彼はゴールを目指す。

練習以上の出来で、彼は無事完走した。

「すいきん」と書かれたゼッケンで彼は走った

「にし すいきん」で来年は走ろう

奈良マラソンの申し込みでゼッケンに「にし すいきん」と書いてもらおうとしたが、五文字までという制限があり、彼は「西すいきん」と登録した。

レース当日、「西すいきん」と書かれたゼッケンで、彼は気合いを入れている。「すいきん」よりは呼びにくいのだろうか、沿道からの呼び声が聞こえない。

途中の自販機で缶コーヒーを買い、飲んでいると、沿道の人から「西すいきん」という名前なのですか」と聞かれ、「ふたり分のペンネームです。私はすいきんで、西はもうひとりです」と答えた。

今年も竹の琴を聞きながら、二十五キロ地点で折り返したものの、二十六キロ地点で転んでしまった。ここであきらめるわけにはいかないと立ち上がり走り続けたが、各関門の制限時刻との余裕が次第に少なくなった。

最終関門は三十八キロ地点である。普通に走っては関門時刻に間に合いそうもない。彼は意を決して、五分間スパートした。給水所をパスして、ひた走っていると関門が見えてきて「あと二十秒」との声。「五十、五十一……」と続き、「五十八、五十九」右方向から関門封鎖の紐が張られてくる。間一髪、関門通過して「関門封鎖」の声を聞いた。

西すいきんの一秒である。

あとは四・二キロを三十分で走れば良く、ウイニングランである。制限時間の一分三十秒前にゴールした。

「西さん がんばれ」との声援が嬉しい

完走メダルを受け取り 西すいきんは 来年も走る